

説一切有部の修行体系における信

——随信行・信勝解を手掛りにして——

兵 藤 一 夫

はじめに

信(sradha)と慧(prajna)は仏道における根本的な二つの要素であり、原始仏教(阿含・ニカーヤ)以来さまざまに説かれている。一般的には信は情意的で慧は理知的であり、両者は相対するものの如くに考えられる。しかし、両者には密接な関係があり、一方が深まることによって他方が生じたり深まったりもする。そして或る面では両者の相即も考え得る。このことは仏教においてもほぼ妥当する。仏教では悟りの証得は慧によるとされて、慧が最も重要で中心となる要素となるが、信の意義を見落すことはできない。仏教の実践は仏・法・僧の三宝に対する帰依、すなわち信に始まるのである。従って、仏教の実践は信に始まり慧に至るとも見なし得るであろう。

また、信は心の澄浄さとも規定されることによって、慧に親近し相即する面をも持っている。

そうした中で、原始仏教における信の意義や信と慧との関わりについては、すでにすぐれた研究がなされており、^①ほぼ明らかにされている。そこで、この小論ではそれらの研究に基づきながら、原始仏教以後のアビダルマ仏教、特に説一切有部、の修行体系の中で信が如何に位置づけられているかを、慧との関わりにおいて考察してみたい。その際、主として、七聖者の中の随信行者(sradhānusārin)、随法行者(dhamānusārin)、信解脱者(sradhāvīṃśaka)又は信勝解者(sradhāvimukta)、見至者(dṣīpīpata)という語を手掛りとしていくことにする。七聖者は解脱に至るまでを信・定・慧の三種によって分類したものであるから、修行体系における信を考察

する場合最も適当と思われる。^④ また、これらの語の解釈の中に有部の信に対する理解の一面が出ているとも思われるからである。

一 信の語義

すでに明らかにされている如く、原始仏教における信には二つの面が見られる。一つは、仏教の実践体系の最初に位置づけられるもので、三宝への帰依などとして示されるものである。これは一般に解脱の領域たる慧よりも劣ったものとされ、慧の獲得を指向するものである。『大智度論』にいう「仏法大海信為ニ能入ニ智為ニ能度ニ」(大正25・63a)の能入の信に相当するものである。もう一つは、同じ信ではあっても、それが深められ浄化されたもので、対象に対して心が澄浄となることである。対象に対して思い惑いがなくなり、対象を確信することである。この信は、情意的な面を残しながらも前者よりはるかに慧に親近したもので、理知的な面が看取される。原始仏教におけるこのような信の語義は、アビダルマ仏教においてもほぼそのまま受継がれているが、後の考察の前提としてここで有部における信の語義を紹介し、かつ概念を確認しておく。

先ず『集異門足論』では五力(信・精進・念・定・慧)を説明する中で、

問信力云何。答於ニ如来所ニ修ニ植淨信ニ根生安住、不_下為ニ沙門或婆羅門或天魔梵或余世間一如法引奪_上。是名ニ信力。^(大正26・425c)

これは同論の五勝支の第一勝支の説明と同一であり、ここでは次のように註釈されている。

於ニ如来所ニ修ニ植淨信ニ者、如来云何。答_上正等覺說名ニ如来。淨信云何。答若依ニ出離遠離所生善法ニ諸信性隨順性印可性已愛樂當愛樂現愛樂性心清淨性故名ニ淨信。即此淨信於ニ如来所ニ已修植當修植現修植。由_レ斯故說_レ於ニ如来所ニ修_レ植淨信。言_ニ根生_ニ者、謂此淨信有_ニ三種根_一、一者無漏智、二者無漏善根。故名_ニ根生。言_ニ安住_ニ者。謂由_ニ如_レ是行相_ニ根生、即由_ニ如_レ是行相_ニ安住。若由_ニ如_レ是行相_ニ安住、即由_ニ如_レ是行相_ニ根生故名_ニ安住。——(後略)——^(大正26・422c)

ここに説かれる淨信は如来に対して生じたもので、無漏なる根から生じた堅固な信である。従って、原始仏教で説かれる四預流支たる四証淨における淨信に相当するものと考えられる。その中で信の法相的解釈として、隨順性、印可性、愛樂性、心清淨性が示されている。

次に『俱舍論』では、

信とは心の澄浄さである。別な人たちは「四」諦と「三」宝と業と「その」果に対する確信である」と

【言う】。(AKBh. p. 55, II. 6-7)

ヤシューミトラは前者を註釈して「煩惱と随煩惱によって汚れた心が信と結合することにより澄浄になる」(AKV. p. 128, II. 16-17)と述べている。

二 原始仏教におけるもの

すでに指摘されているように、^⑥原始仏教では預流（後のアビダルマの用語では見道）の獲得に関して二通りのあり方が示されている。一は主として信によるもの、他は主として慧によるものである。この中、前者は四預流支たる四証浄（三宝への浄信と聖戒成就）を起源とするもので、主として在家者の実践のあり方である。これに對して、後者は四諦や縁起の道理を現觀することに基づくものである。これら二つのあり方はさらに後に成立したと思われる七聖者（俱解脱・慧解脱・身証・見至・信解脱・随法行・随信行者）の中での二系統に受け継がれていくものと思われる。すなわち、主として信によるものは随信行者↓信解脱者であり、主として慧によるもの

は随法行者↓見至者という形にである。^⑦そこでこれら四聖者が原始經典においてどのように説かれているかを見ておく。

先ず、『中部經典』では、

比丘たちよ、見至者(dīṭṭhippata)とは何か。比丘たちよ、ここにある者が、寂靜な色を越えた無色な解脱なるものに身によって触れておらず、彼には慧によって見た後、幾つかの漏が断ぜられている。そして彼には如来によって説かれた法が慧によって了解され、よく伺察されている。比丘たちよ、彼が見至者と言われる。比丘たちよ、信解脱者(saddhāvinutta)とは何か。

——（以下右と同文）——そして彼には如来に對して信が堅固で根から生えて立っている。比丘たちよ、彼が信解脱者と言われる。

比丘たちよ、随法行者(dhammasārin)とは何か。

比丘たちよ、ここにある者が、寂靜な色を越えた無色な解脱なるものに身によって触れておらず、彼には慧によって見た後、漏は断ぜられていない。そして彼には如来によって説かれた法が応分に了解されている。しかも彼には次のような法がある。すなわち、信根・勤根・念根・定根・慧根である。比丘たちよ、彼が随

法行者と言われる。

比丘たちよ、随信行者 (saddhansarin) とは何か。

——(以下右と同文)——彼には如来に対して信が充分であり、愛が充分である。しかも彼には次のような法がある。すなわち、信根乃至慧根である。比丘たちよ、彼が随信行者と言われる。(MN, ii, pp. 478-479)

このことから、主として慧によるものが見至者と随法行者であり、信によるものが信解脱者と随信行者であることは明らかであろう。そして、見至者と信解脱者は幾らかの漏を断じており、随法行者と随信行者は何らの漏も断じていないとされ、しかも前二者と後二者にはそれぞれ慧と信の深まりの差が認められることから、随法行者

↓見至者、随信行者↓信解脱者という形に図式化し得るであろう。ただ次の点に注意して置く必要がある。先ず、見至者と信解脱者、随法行者と随信行者とはそれぞれ同じ階位にあると考えられている。次に、四者とも「慧によつて見た後」(これは預流すなわち見道の獲得を示すと思われる)という限定句が附加され、また随法行者、随信行者は両者とも、信根乃至慧根が備わっているとされる。これは預流獲得の基本が慧にあることを語り、随信行者も随法行者も五根(信根乃至慧根)を備えているこ

とを語るから、両系統がそれぞれ慧とか信とかのみでは規定され得ないことを示している。しかしそうした状況の中で信解脱者と随信行者という名称に含まれる「信」の語は見至者と随法行者の含意する「慧」と対比的に使われており、その意味で、預流および解脱の獲得における二つのあり方が区別されることになるのである。従つて、この場合の信は、前節で触れたように、深められ、浄化されていくもので、慧に親近しながらも、慧とは性質を異にする情意的な面が強調されている。慧の対象は如来によつて説かれた法であり、信の対象は如来自身であることもそれを示唆しているように思われる。

次に『相應部經典』では、

比丘たちよ、眼は無常であり変化し変異する。——(耳乃至意も同様)——比丘たちよ、これらの諸法をそのように信じ勝解する者は随信行者であり、正性決定に入り、聖者地に入り凡夫地を越えたといわれる。彼はなした後に地獄・畜生・餓鬼として生じるような業をなすことはない。預流果を現証しない限り死ぬことはない。

比丘たちよ、これらの諸法が慧によつてそのように応分は了解される、その者は随法行者であり、正性決

定に入り——(以下右と同文)—— (S.N. iii, p. 225)

この場合、随信行者と随法行者の違いは、前者が教法を信じ勝解するのに対し、後者が同じものを慧によって了解することである。ここでは信は勝解する (adhinuṇṇa) と同義と見られ、しかも信の対象は慧のそれと同じであり、その点でも慧との親近性を有していると思われる。しかし、やはりこの場合も信は慧との対比の上で考えられているのである。

以上のように、原始經典では見至者、信解脱者、随法行者、随信行者の四者は預流および解脱の獲得における二つのあり方、すなわち、主として慧によるものと主として信によるものを前提にして考えられたものであるため、ここに見られる慧と信は対比的な面が強調されている。そして預流および解脱の獲得は慧を基本とするという傾向を示しながらも、慧と信による二つのあり方が是認されているのである。従って、これら二つのあり方によって得られる二つの預流は、階位としては根本的に何らの差異もないが、預流に至る手段が異っているため結果的に預流としての属性に幾分の差異が見られるのである。主として信によって預流を獲得した者(随信行者)は預流としての応分の慧を備えているが、やはり信が主

要な属性となっている。他方、主として慧による者(随法行者)は応分の信を備えているが、慧が主要な属性となっているのである。同様に、預流を得て未だ解脱(阿羅漢)に至っていない階位(後にいう修道位)に住する信解脱者と見至者も根本的に何らの差異もないが、そのあり方が異っているため結果的にその属性に幾分の差異が見られるのである。

三 上座部におけるもの

パーリアビダンマにおける七聖者中の見至者乃至随信行者の四聖者の解釈は、ほぼ前節ののそれを受継いでいる^①。ただ、原始仏教では充分に明確ではなかった身証者が定による解脱の獲得のあり方として明確化され、信と慧によるあり方と併せて三つのあり方として確立されている。

先ず『無礙解道』「大品」において

無常という点から作意している者は信根が増上である。信根の増上によって預流道を獲得する。それ故随信行者といわれる。四根(勤・念・定・慧)が随順し、俱生縁・互縁・依縁・相応縁となる。信根の力によって四根の修習がある。どんな者にしろ信根の力によつ

て預流道を獲得する者はすべて随信行者である。

無常という点から作意している者は信根が増上である。信根の増上によって預流果を現証している。それ故信解脱者といわれる。四根が随順し、俱生縁・互縁・依縁・相応縁となる。信根の力によって四根が修習されており、よく修習されている。どんな者にしろ信根の力によって預流果を現証した者はすべて信解脱者である。

無常という点から作意している者は信根が増上である。信根が増上によって一來道を獲得する。——乃至——一來果を現証する。——乃至——不還道を獲得する。——乃至——不還果を現証する。——乃至——阿羅漢道を獲得する。——乃至——阿羅漢果を現証する。——乃至——どんな者にしろ信根の力によって阿羅漢たることを現証した者はすべて信解脱者である。

苦という点から作意している者は定根が増上である。定根の増上によって預流道を獲得する。それ故身証者といわれる。——(中略)——どんな者にしろ定根の力によって阿羅漢たることを現証した者はすべて身証者である。

無我という点から作意している者は慧根が増上であ

る。慧根の増上によって預流道を獲得する。それ故隨法行者といわれる。——(中略)——

無我という点から作意している者は慧根が増上である。慧根の増上によって預流果を現証している。それ故見至者といわれる。——(中略)——どんな者にしろ慧根によって阿羅漢たることを現証した者はすべて見至者である。(P.V. i, pp. 53-55)

ここでは無常・苦・無我に信・定・慧の三つを対応させ、預流から阿羅漢に至る八つ(四向四果)をそれら三つそれぞれによって獲得する仕方が示されている。すなわち、すべてを無常なりと見て主として信によるものは随信行者↓信解脱者であり、すべてを苦なりと見て主として定によるものは身証者、すべてを無我なりと見て主として慧によるものは随法行者↓見至者である。このように五根(信・勤・念・定・慧)の中で主となるものが決められているが、その特定の根が増上となることによつて必ず他の四根が随順し、俱生縁などとなって修習されるとするのである。聖者は五根をすべて備えているが、その中で増上となる根に信あるいは定あるいは慧の三つの場合があり、それに基づいて聖者が三に分類されるのである。この中で、信と慧に限って考えれば、

前節の原始仏教におけるものとほぼ同様であつて、隨信行者と信解脱者には信を主とするあり方が含意され、隨法行者と見至者には慧を主とするあり方が含意されている。そして隨信行者と隨法行者、信解脱者と見至者はそれぞれ同一の価値である。特に修道位たる後二者の間はいささかの差もないとされるのである。

四 有部におけるもの(一)

次に、有部におけるこれら四聖者の解釈を見ておく。

そこには原始經典やパーリアビダンマと比較して幾つかの重要な相違点が見られる。先ず『集異門足論』「七法品」において七補特伽羅を説明する中で、

云何隨信行補特伽羅。答此隨信行補特伽羅先凡位中稟性多信多愛多淨多勝解多慈愍、少思惟少称量少觀察少簡択少推求。彼由多信多愛多淨多勝解多慈愍一故、得_レ遇_下如来或_レ仏弟子宣_三說正法_一教授教誡、由_レ遇_下如来或_レ仏弟子宣_三說正法_一教授教誡、以_三無量門一分_一別_中開_一示苦真是苦集真是集滅真是滅道真是道、便作_三是念、善哉善哉、所_レ言諦実定不_三虚妄_一、苦真是苦集真是集滅真是滅道真是道、我於_三今者_一一_レ心_三勲觀_一察諸行無常有漏行苦一切法空無我、作_三是念_一已_レ遂勤觀_三察諸行無常有漏行

苦一切法空無我、由_三勤觀_一察諸行無常有漏行苦一切法空無我一故、便於_三後時後分_一修_レ得_三世第一法_一、從此無間生_三苦法智忍相応聖道_一觀_レ欲界行為_一無常或苦或空或無我隨一現前乃至未_レ起_三道類智現在前_一、爾時名_三隨信行_一。是名_三隨信行補特伽羅_一。

云何隨法行補特伽羅。答此隨法行補特伽羅先凡位中稟性多思惟多称量多觀察多簡択多推求、少信少愛少淨少勝解少慈愍、彼由多思惟多称量多觀察多簡択多推求一故、得_レ遇_下如来或_レ仏弟子——(以下右と同文)——我於_三今者_一一_レ心_三自審知_一一_レ心_三自審見_一一_レ心_三自審察_一諸行無常有漏行苦一切法空無我、作_三是念_一已_レ便自審_三察諸行無常有漏行_一苦一切法空無我一、由_三自審_一察諸行無常有漏行苦一切法空無我一故、便於_三後時後分_一修_レ得_三世第一法_一、從此無間生_三苦法智忍相応聖道_一觀_レ欲界行為_一無常或苦或空無我隨一現前乃至未_レ起_三道類智現在前_一、爾時名_三隨法行_一。是名_三隨法行補特伽羅_一。

云何信勝解補特伽羅。答即隨信行補特伽羅得_三道類智_一故捨_三隨信行性_一入_三信勝解數_一。是名_三信勝解補特伽羅_一。云何見至補特伽羅。答即隨法行補特伽羅得_三道類智_一故捨_三隨法行性_一入_三見至數_一。是名_三見至補特伽羅_一。

(大正 26・435 b c)

ここでは随信行者・信勝解者と随法行者・見至者の二つのあり方が、仏道修行者の生来の性質の相違として把えられている。すなわち、随信行者は生まれつき信や愛や随順や勝解する性質に富み、思量や観察などを好まない。随法行者はその逆である。前者は仏陀やその弟子の説法を聞き、四諦の義は真理であると確信して修行を始め、修所成の慧に基づく聖道を修して見道を得るのである。

一方、後者は説法を聞いた後、自ら四諦の義を思惟・観察し、それが真理なることを知って修行を始め、以後、随信行者と同様にして見道を得るのである。ただここで留意して置かなければならないことは、仏道修行者をその生来の性質によって二つに分けてはいるが、それは仏教こそが真理であるとして実際の修行を始める契機を区別しているにすぎないのであって、見道獲得の具体的な手段(道)は両者とも修所成の慧に基づく道なのである。従って、ここには原始仏教やパーリアビダンマの如き預流(見道)獲得の主要な手段としての信の意義は認められず、仏道修行への能入の信の意味合いが強い。

この考え方は基本的には『大毘婆沙論』に踏襲されている。ただ『大毘婆沙論』では随信行・随法行に関して『集異門足論』とほぼ同様な解釈を示した(大正27・278a

く)後で、さらに様々な解釈を与えている。このことは随信行・随法行などに関して当時様々な解釈がなされていたことを示しているであろう。以下にその主な所を紹介しておく、

『大毘婆沙論』ではそれぞれに関して語義解釈がなされている。先ず随信行者に関して、

問何故名_レ随信行。答由_レ彼依_レ信隨_レ信行_一故名_レ随信行_一。謂依_レ有漏信_一隨_レ無漏信_一行、依_レ有縛信_一隨_レ解脫信_一行、依_レ有繫信_一隨_レ離繫信_一行。由_レ信為_レ先得_レ入_レ聖道。如_レ是種類補特伽羅從_レ本以來性多信故、若聞_レ他勸_レ汝_レ應_レ務_レ農以自存活。彼不_レ思察_一我為_レ不_レ應作_一、我為_レ能作_一為_レ不能作_一、為_レ有_レ宜便_一為_レ無_レ宜便_一。聞已便作。——(中略)——彼漸次修_レ聖道加行_一展轉引_レ起世第一法_一、無間引_レ生苦法智忍_一。從_レ此見道十五剎那名_レ隨信行_一。(大正27・279a~b)

随信行者とは自らの有漏信(世間的な信)に依って無漏信(出世間的な信)に随順して行ずる者である。旧訳によれば「依_レ信生_レ信、依_レ有漏信_一生_レ無漏信_一……」(大正28・217a)とあり、その意味は一層明白である。このように語義解釈の上では世間的な信を深め浄化することで無漏なる信、すなわち預流を得ることになり、信が中心的

な役割を担うことになるのであるが、実際は少し趣を異にしている。直後に述べられる随信行者の具体的な修行のあり方や随法行者との比較からして、ここでの信の意義は「信為レ先得レ入ニ聖道」にあり、その意味で前述の『集異門足論』の立場と異っていないと思われる。このことは次のことから確認されるであろう。

問随信行者如レ有ニ爾所信ニ亦有ニ爾所慧。随法行者如レ有ニ爾所慧ニ亦有ニ爾所信。何故一名ニ随信行、一名ニ随法行。耶。答或但信レ他展転修行而入ニ聖道、或自思察展転修行而入ニ聖道。若但信レ他展転修行入ニ聖道者名ニ随信行。若自思察展転修行入ニ聖道者名ニ随法行。

(大正27・279b~c)

随信行者も随法行者も共に信も慧も備えているのにどうして区別されるのかとの問に対して、ただ他者を信じて仏道の修行を続けて聖道に入る(預流)者と自ら思察した後その修行を続けて聖道に入る者とが区別されるのであると答えられる。すなわち仏道修行者の資質に由来する、修行を始める契機が区別されているに過ぎないのである。

次に信勝解者に関して、

問何故名ニ信勝解。答由ニ彼依レ信得ニ信勝解ニ故名ニ信勝

解。謂依ニ見道所撰信ニ得ニ修道所撰信勝解、依ニ向道所撰信ニ得ニ果道所撰信勝解。¹⁵⁾ (大正27・280a)

信勝解者は修道位にあり、それは見道所撰の信に依拠して修道所撰の信勝解(信による勝解)¹⁶⁾を得た者である。本性として多信、多愛な者であるので、見道所撰の無漏なる信がさらに増上となっているのである。これに対して見至者は本性として多思惟な者であるので、見道所撰の無漏なる見(慧)が増上となっているのである。そして信勝解者と見至者を区別するのは、修道における異相・異門、すなわち仏道修行者の特性やあり方の相違を現わすためであると考えられている。すなわち仏道修行者の資質・機根に基づいた相違であると見るのである。このことは有部の信に対する理解の特色と深く関係していると思われるので後に詳しく考察する。

ところで、この仏道修行者の資質の問題とも関連するのであるが、『大毘婆沙論』では新たな重要な問題が議論されている。それは阿羅漢の退・不退の問題である。

有部では阿羅漢を二つに分け、一方は阿羅漢位から退することがあると考える。この問題は『大毘婆沙論』において初めて本格的に詳細に議論されてくるが、この検討の過程において、退を起す阿羅漢の資質が問題とされ、

一部では前述の随信行者・随法行者との関わりが指摘されている。

問何等人可_レ退、何等人不_レ可_レ退耶。答有_レ人信_レ他随_レ他意欲_二而入_三聖道。有_レ人自信随_三自意欲_二而入_三聖道。初人可_レ退、後人不_レ可_レ退。復次有_下不_レ思_レ量觀_レ察得失_二而入_三聖道。有_下極思_レ量觀_レ察得失_二而入_三聖道。初人可_レ退、後人不_レ可_レ退。——(中略)——復次有_三信為_レ先而入_三聖道。有_三慧為_レ先而入_三聖道。初人可_レ退、後人不_レ可_レ退。——(中略)——復次有_三随信行種性。有_三随法行種性。初人可_レ退。後人不_レ可_レ退。復次有_三鈍根者。有_三利根者。初人可_レ退、後人不_レ可_レ退。——(大正27・319 a ~ b)

このような分析を見ると、有部の阿羅漢の退という見解は、その最大の根拠は經典にあり、その理論的根拠は三世実有説にあることは確実であるが、もっと身近で具体的な事例を想定して生まれたものではないかと思われる。現実には果からの退が起こり、それが仏道修行者の資質と相關関係を有していることが了解されていたのであろうと思われる。

五 有部におけるもの(二)

前節で見てきたように、『集異門足論』から『大毘婆沙

論』までに、有部では随信行者乃至見至者の解釈や阿羅漢の退・不退の問題の分析や検討を通して、仏道修行者の資質・機根に目が向けられてきた。この傾向を受けて、仏道修行者の機根を鈍と利に分けることによって有部の修行階程を初めて一貫したものに体系化したのが『阿毘曇心論』である。これまでの仏道における信と慧による二つのあり方を修行者の機根の鈍と利に基づくものとして把握することによって、凡夫位から阿羅漢位に至るまでの階程の実質的に一貫した体系化が可能となったのである。この場合、鈍根と利根とは修道位における分析に基づく仏道修行者の生来の資質に関して言われているようであり、信と慧では慧に比重を置いた捉え方である。

この考え方はすでに『大毘婆沙論』において見られるが、未だ主流の学説とはなっていない¹⁰⁾。しかし、内容的には先に紹介した『集異門足論』以来の随信・随法行者の捉え方と一脈通じるものがあり、その意味では全く新たな考え方ではない。ただ、これにより原始仏教以来の信と慧によるという異った二つのあり方を、慧に比重を置いた一つの能力の鈍・利という程度の差としてのものに置換えることによって実質的に一本化したのである。この辺りの事情を、『阿毘曇心論』以後の完成した体系を示

していると思われる『俱舍論』において見ておく。先ず、随信行・随法行者に關して、

そこ（見道十五剎那）にいる鈍根の者が随信行者といわれる。利根の者が随法行者と「いわれる。」信によって随行することが随信行であり、彼にそれがあるのが随信行者である。或いは信によって随行することが彼にとって習慣となっているのが「随信行者」である。

先に他への信によって対象に随行するからである。随法行者も同様である。先に自分自身で經典などの法によって対象に随行するからである。（AKBh. p. 353. ff. 13-15）

ヤシヨミミトラの註釈によれば、随信行者とは先に他者に教えられて苦諦などを行ずる者である。そして彼は特に「先に」という語を註釈して「先にと限定することによって、修習の時には他者の教誡に依らずして対象に随行することが説かれている」（AKV. p. 548. ff. 10-11）と述べる。これに対して、随法行者とは先に自分自身で經典などの十二分教によって理解して苦諦などを行ずる者である。このように、随信行者と随法行者の差異は最初に他者から教えられてそれを信じるか、或いは自分自身で理解してかという、きっかけの違いであり、修行を始

めた後は両者共に自ら行じていくのである。従って、両者には鈍根・利根という資質の違いはあっても、見道位にいる者としては区別はないのである。^⑧これについて『雜心論』では「随信行法随法行法及見諦道此三種法尽同一相。差別者随信行者鈍根、随法行者利根。」（大正28・91c）と述べられている。

次に信勝解者と見至者に關して、

その時（第十六剎那）における、鈍根の、以前随信行者であった者は信勝解者といわれる。利根の、以前随法行者であった者は見至者といわれる。「両者はそれぞれ」信と慧が増上であることから勝解と見によって力強くされているからである。（AKBh. p. 354. ff. 14-15）ヤシヨミミトラの註釈によれば、「信が増上であることから勝解によって力強くされているから信勝解者である。信の増上な解脱者が信勝解者であるからである。しかし彼には慧が決してないのではないが、それ（慧）によって力強くされているのではないからその名を取らないのである。」（AKV. p. 549. ff. 7-9）とされる。

又、随信行者乃至見至者の分類の観点に關して次のように述べられている。

加行の点から随信・随法行者がある。まさに先「の

凡夫位」において他への信に、および法に随行することによって、対象に対して加行するからである。根の点から信勝解者と見至者がある。鈍〔根〕と利根であることから信勝解と慧が増上であるからである。

(AKBh. p. 380, II. 8-9)

この個所に対してスティラマティは興味深い註釈をしてい¹⁹。

「信勝解と慧が増上であるから」という中、信による勝解が増上であるので信勝解者である。信が増上なのは鈍根たることである。彼は信が増上であるが、慧はそうではない。同様に、慧が増上なのは利根たることである。彼は慧が増上であるが、信はそうではない。随信・随法行者の二人にも根の区別があるのではないかといえ、あるのではあるが、そうではあっても、随信・随法行者の二人は根の点からは区別されない。見道では両者とも見所断の煩惱を断ずる時間が等しいからである。そして修道では等しく大造作によって煩惱を断じるために、味着すると味着しないとの二者が根の区別によって分けられるからである。(TA. Th.

423 a³-b)

勝解者は信によって勝解が増上となった者であり、

見至者は慧の増上な者であって、両者共修道位における者である。そして仏道修行者を根の点から鈍と利に分類する直接的な契機となるのがこの修道位における二者である。そこで、如何にして修道位において根の区別がなされるかを、スティラマティの註釈を手掛りにして考察してみよう。修道では大きな努力によって煩惱を断じるので、修行者が対象(三昧)に味着するとならないとでは大きな差が生じる²⁰。味着する者は煩惱を断じ難く、味着しない者は容易である。その意味で前者は根が鈍であり、後者は利である。そして味着する傾向が強いのは信の増上な者であり、味着しないのは慧の増上な者である。すなわち、修道位(修所断の煩惱を断ずるといふ仏道修行)において、慧が増上である方が有利であり、信が増上であるのは不利な面が多いのである、ということが出来る。ところで、信の増上な者は生来の資質として信や愛に富んだ情意的な性格の者であり、他方、慧の増上な者は思惟や観察に富んだ理知的な性格の者なのである。

このように、修道位における修行者の分析を直接の契機として鈍・利根の分類がなされたが、それは修道位での煩惱の断に関して有利であるか否か、すなわち速くて容易であるか否かに基づくものであった。そしてその鈍・

利根は生来の二つの資質と密接な関係があり、その資質を媒介とすることにより他の階位、すなわち凡夫位・見道位・無学道（阿羅漢）の修行者に対してこの鈍・利根という二つの範疇（修行にとつて不利・有利という意味も含めて）を適用することができるのである。④ただ、スティラマティも指摘するように、見道位において根の區別は名目的には可能であるが、見道は十五刹那と定まっているので随信・随法行者の二者は道において差異はないから根の点から区別されない。

無学道における鈍・利根は阿羅漢の退・不退の問題と密接に関係する。有部では六種の阿羅漢が考えられている。退転と想法と護法と安住法と堪達法と不動法である。さらにこれらは前の五つと不動（不退）法とに大別される。前の五つ（退法乃至堪達法）はまとめて時解脱或いは時愛心解脱と呼ばれ、信勝解者が解脱し阿羅漢果を得たのである。不動法は不時解脱或いは不動心解脱と呼ばれ、見至者が阿羅漢果を得たのである。従つて、阿羅漢果から退する可能性のある不安定な時解脱の阿羅漢たちは鈍根であり、利根たる不退阿羅漢に対して不完全さを内含しているのである。

ところで、この六種の阿羅漢は声聞種性内の種性の細

分類として固定化され、退法から不動法へと種性（機根）が段階的なものとして把えられる。そしてこの種性を高める、すなわち機根をより好ましいものにするための新たな修行として練根（*Indriyasancāra*）ということが導入される。これら六種性や練根の考え方は他の階位、すなわち修道位・見道位⑤・凡夫位にも適用される。

このように、完成された有部の体系では、信と慧という二つの仏道修行のあり方が、修行者の機根の鈍と利として統一的に把握され、練根という考え方が導入されて、凡夫位から不動阿羅漢に至る一貫した修行階程が実現するのである。

ま と め

原始仏教以来、信と慧という二つの仏道修行のあり方が説かれ、それらは原則的に七聖者の中の二系統（随信行者↓信解脱者と随法行者↓見至者）に受継がれている。原始仏教でも相当後期のものと思われる七聖者の分類では、慧をより重視し、預流獲得の基本にしようとする傾向を示しながらも、信と慧による二つのあり方が是認されるが、それら二つのあり方には本質的な差別は見られない。特に修道位に相当する信解脱者と見至者の間に何

ら本質的な差別が示されていないことは注目される。従って、原始仏教での仏道修行における信の意義は大きい。パーリアピダンマ（上座部）においてはほぼ原始仏教の考え方が受継がれている。

有部では次の如くである。先ず、『集異門足論』以来、信と慧による二つのあり方は、仏道修行者の生来の資質に帰せられる。随信行者と信勝解者は資質として信や愛に富んだ者であり、随法行者と見至者は思惟や観察に富んだ者である。この中、随信行者における信の意義は仏道修行を始める契機として考えられているだけで、見道（預流）獲得の主要な手段とは見做されていない。主要な手段は修所成の慧であるからである。

『大毘婆沙論』の頃になると、修行階程に関してもアビダルマ的分析が進められる中で、見道以後の修道・無学道もより詳細に分析されてくる。それによって原始仏教では明確でなかった問題、修道における煩惱の断の遅速難易や阿羅漢の退・不退などが明らかとなる。有部ではこれらの原因を機根の上に求める。特に修道における遅速難易に関して、信が増上な者は煩惱の断が遅く困難であるので鈍根であり、慧が増上な者が利根であることと相對する。また、鈍根の者は阿羅漢を退する可能性が

あり、練根をなすことが期待されている。これらのことは、有部では、鈍根の者の資質は見道以後の修道・無学道において障害とまではならないにしても、少くとも好ましいものではないと見なされていたことを示していると思われる。^②

略号

- MN. Majjhima-nikaya PTS ed.
SN. Samyutta-nikaya PTS ed.
PV. Paṭisambhida-magga PTS ed.
AKBh. Abhidharmakośabhāṣya P. Pradhan ed. 1967.
AKV. Abhidharmakośavyākhyā U. Wogihara ed. 1971.
T.A. Tattvartha Pek. ed. No. 5875.

註

- ① 舟橋一哉『原始仏教思想の研究』（法蔵館昭27）（特に一六三頁―二二八頁）や藤田宏達『原始仏教における信の形態』（北大文学部紀要第6号、一九五七）など。
② 原始仏教やパーリアピダンマでは信解脱が用いられ、有部では信勝解が用いられる。ただ、パーリでも信勝解（saddhāvimutta）を伝える写本もあり、有部の論書でも『毘婆沙論』（旧訳、大正28・216b～218a）などのように信解脱（ただしこれが sradhāvimukta の訳語かどうか確定はできないが）を伝えるものもあり、また、すでに指摘されているように（桜部建『仏教語の研究』（文栄堂昭50）pp. 38-39）、vimukti が adhimukti と通用される場合がある

など、この問題はさらに検討を要することが多いので、詳細は別な機会に譲りたいと思う。

③ 原始仏教やパーリアビダンマではこの三種が区別されているが、有部では定によるもの(身証者)は減界定を得ることと見て、信と慧によるものとは別な体としない。

④ 他に、四善根位中の煥位と頂位も信との関わりが言及されており(『発智論』大正26・918・919a)、ここでは経典からの引用が見られる。四善根位に関しては検討すべきことが多いのでここでは触れないことにする。また四証淨も本論のテーマには興味ある問題であるが、有部ではそれを見道獲得の手段というよりも見道獲得者の属性と見なしているようである。ここでは紙幅の都合もあり割愛する。

⑤ 藤田博士前掲論文参照。

⑥ 舟橋博士前掲書一八四頁—一九六頁参照。

⑦ 本論三五頁および註③参照。

⑧ 対応する『中阿含』は「阿濕貝経」(大正1・751c)である。そこでは見到と信解脱、法行と信行の差異はどちらも「随_三所聞法_二以_二慧増上_二觀_二増上_二忍_一」と「随_三所聞法_二以_二慧觀_二忍_一」という慧の強さの差異と見なされている。

⑨ このことから、七聖の成立が四証淨よりも後であることが推測される。

⑩ 特に『人施設論』(Puggala-paññati, PTS ed. p. 17)にはその傾向が著し。

⑪ 『清淨道論』(Visuddhimagga, PTS ed. p. 655)にも同様な言及がある。ただそこでは、①信によるもの—随信行者(預流道)・信解脱者(預流果乃至阿羅漢果)②定による

もの—身証者(預流道乃至阿羅漢果)③慧によるもの—随法行者(預流道)・見至者(預流果乃至阿羅漢道)・慧解脱(阿羅漢果)となっている。ところで無常・苦・無我を順次、信・定・慧に対応させる根拠は筆者には明らかではない。ただ、ヤンショーミトラも同様なことを述べている。(AKV, p. 534, l. 32—p. 535, l. 21)

⑫ 『無礙解道』「大品」(PV, i, p. 51)では通達位(見道)において信根の増上な者でも慧根が増上となると述べられている。これは慧によって見道を獲得するという有部の考え方にも通じる。

⑬ このことは随信・随法行者に関して言えることで、修道位の者にとっては逆に生来の資質の違いが重要な意味を持つてくる。

⑭ 随法行者について「慧為_レ先得_レ入_三聖道_一」と述べられている。

⑮ 『毘婆沙論』(旧訳、大正28・217b)では「問曰、何故名_二信解脱_一。答曰、以_レ信觀_二信_一、從_レ信得_レ信。以_レ信觀_二信者_一以_二見道信_一觀_二修道信_一、從_レ信得_レ信者從_二向道信_一得_レ果道信。是名_二信解脱_一」となっている。

⑯ ヤンショーミトラの註釈(AKV, p. 594, l. 29)に基づく。

⑰ Seiki Miyashita “On the Retrogression of the Arhat in the Abhidharmakośa” (印仏研第30—2号、昭5)参照。

⑱ 最近『大毘婆沙論』と『阿毘曇心論』を初めとする心論系の論書との関係が再び議論される傾向にある。後者は前者の概要書であるという伝統的理解では矛盾する点も多い

が、筆者は原則的には、やはり、『大毘婆沙論』の広汎な議論・検討を受けて『阿毘曇心論』の完成度の高い体系が生まれたのではないかと考えている。

⑲ 『大毘婆沙論』における鈍根・利根の説は多くの他の解釈と同列に紹介され特別視されていない。(大正27・279c) だが、信勝解者が見至者に転根することが詳しく議論されており(大正27・347b~348c)、鈍根・利根の説が相当ポピュラーになっていたことは想像できる。

⑳ 見道は十五刹那と定まっているので、随信行者と随法行者を根の点からは区別し得ないことがステイラマティによって指摘されている。本論四二頁参照。

㉑ 『阿毘曇心論』(大正28・820a)、『阿毘曇心論経』(大正28・851b)も同様な言及がある。

㉒ 原文は "dad pas mos pa dan nthon bas thob pa

ḍḍa" (信勝解者と見至者) となっているが誤りであると思われる。

㉓ 修道には有漏道と無漏道があり、味着は有漏道において生じるものと思われる。

㉔ すでに『大毘婆沙論』(大正27・280b)においてこの考え方が見られる。

㉕ この他に不動法は無学道において他の阿羅漢種性が練根して得ることがある。

㉖ 見道位は非常に短時間(十五刹那)であるから加行をしたり、そこから退したりすることはないと考えられている。従って、見道位において練根はない。

㉗ このことは有部の知的傾向(他の部派に比べて分析的であり体系的であることなど)の一面を示すものでもあろう。